



## 平成16年度経営診断結果の概要

本協会にて実施した畜産経営支援指導事業における畜産経営の集計結果がまとまりました。畜種別の概要は以下の通りです。

### (酪農経営)

平成16年度は経産牛1頭当り乳量が向上したものの、経産牛処分率が過去最高となり、後継牛不足により飼養規模が縮小し、経営全体の出荷乳量が大幅に減少した経営が多かった。課題となっていた繁殖成績向上や乳房炎防除については改善の方向に向かっているが、生産基盤を今後どう立て直すかが大きな課題である。一方、経営面では乳飼比が購入飼料の値上がりにより過去最高となったが、経産牛1頭当り乳量のアップにより、生乳販売収入が増加したことに加え、初生子牛価格も堅調に推移したことから、経産牛1頭当り所得は170千円と前年を上回った。

区 分	単 位	H13	H14	H15	H16
経産牛規模	頭	34.8	34.7	32.4	29.9
経産牛1頭当り産乳量	kg	8,174	8,351	8,040	8,440
経産牛処分率	%	21.4	25.3	30.5	34.1
体細胞数	千個	272	350	469	403
経産牛平均分娩間隔	月	15.4	15.5	15.8	15.3
乳飼比(経産牛当り)	%	42.0	43.7	47.3	47.5
経産牛1頭当り所得	千円	187	184	156	170

### (肉用牛経営)

平成16年度は、繁殖経営で購入飼料への依存度が高くなったことや、肥育経営で素牛価格、飼料価格がともに値上がりしたことから、いずれの経営でも費用の増加が見られた。しかし、収入面で子牛価格、枝肉価格がともに堅調に推移したことから、所得的には前年を上回った経営が多く見られた。

#### 1 繁殖経営

子牛販売価格が前年より61千円増加したことから、総原価は高くなったものの、所得的には近年で最高となった。しかし、技術面で分娩間隔が13.6ヵ月と依然として長いので、引き続き改善が必要となっている。

販売子牛1頭当り	単 位	H13	H14	H15	H16
分 娩 間 隔	月	13.5	13.7	13.2	13.6
子牛販売価格	千円	357	352	417	478
自家労賃控除総原価	千円	308	263	293	318
所 得	千円	76	101	129	171

### 2 肥育経営

素牛費や総原価が高くなったものの、肥育牛販売価格が大幅に増加した乳・交雑種肥育経営では所得増につながった。しかし、販売価格が伸びなかった和牛肥育経営では出荷牛1頭当り所得で、前年より21千円の減の100千円となった。

(単位：千円)

出荷牛1頭当り		H13	H14	H15	H16
和牛肥育経営	肥育牛販売価格	751	679	917	915
	自家労賃控除総原価	773	682	806	807
	出荷牛素牛費	372	384	360	384
	所 得	11	12	121	100
乳・交雑種肥育経営	乳用種販売価格	296	149	274	340
	交雑種販売価格	483	403	507	560
	自家労賃控除総原価	387	290	397	406
	出荷牛素牛費	93	108	98	104
所 得	70	59	39	106	

### (養豚経営)

平成16年度は、BSEによる米国産牛肉、鳥インフルエンザによるタイ産鶏肉の輸入停止等により代替品として豚肉の消費が拡大したことから、豚枝肉販売価格が前年を大きく上回って堅調に推移した。コンサル平均では457円/kgと前年より57円も高くなり、安定した所得の確保につながった。

繁殖部門では、離乳時育成率、離乳から受胎までの日数、分娩間隔、年間回転が前年より悪化したことから、年間換算離乳豚頭数が21.2頭と前年に比べ0.6頭減少した。一方、肥育部門では、事故率を指標の3%以内に抑えていたのは11事例中2事例しもなく、逆に10%以上の非常に高い事例が3事例も見られた。事故率低減は今後の養豚経営での大きな課題のひとつであり、早急に対応し改善を図る必要がある。

区 分	単 位	H13	H14	H15	H16
年間換算離乳豚頭数	頭	21.8	22.8	21.8	21.2
肉豚事故率	%	6.2	5.9	6.4	6.4
枝肉1kg当り総原価	円	414	402	412	422
種豚(♀)1頭当り所得	千円	175	177	70	143